「讃岐百景」のひとつ、三木町メタセコイヤの森・太古之森。四季折々の風景が楽しめる散策コースは、医学部陸上部のランニングコースでもあります。讃樹會ロゴマークは新緑のメタセコイヤです。
（撮影　写真部３年　杉本美咲さん）

讃樹會

令和７年２月１日発行

CONTENTS

02　年頭所感
03　ニュースの窓
08　2024年度研究助成金／研究奨励金受賞の言葉
13　理事会議事録
14　特集／外科手術基本手技講習会のご案内
16　国外留学助成金受賞の言葉
17　教室便り
18　病院だより
22　『私のキャリア』ケーススタディVol.３
24　学会開催報告
25　支部会・懇親会
32　学生の短期留学報告
34　学生支援（競争的資金）活動報告
38　医学部祭開催報告
41　編集後記／事務局からのお知らせ

発行　香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX　087-840-2291
E-mail　sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp
https://dousoukai.site/sanjukai/
発行人　星川　広史
編集人　谷　　丈二
印刷所　㈱美巧社

年　頭　所　感

混沌とした時代をどう生きる？？

讃樹會会長
星川　広史（平成２年卒・５期生）

同窓会の皆さま、令和になってはや７年目になりました。１年が過ぎるのが年々早くなる、もしかして１秒が0.9秒くらいになっていて、365日が330日くらいの長さになっているのでは、みたいな馬鹿なことを考えるのは間違いなく歳のせいだと思われます。

日本国内でも政権与党が少数与党になり、お隣の韓国では大統領が弾劾され、米国ではトランプ氏が大統領に返り咲き、シリアでは独裁政権が崩壊し、相変わらずガザやウクライナの戦争は終結の兆しが見えず、とまさに世界は混沌の渦の中です。

医療の世界でも、多くの医療機関で増収減益が続いており、400床以上の病院では対前年比の医業収益が通年平均で８億４千万円減少する見込みだそうです。大学病院ではその傾向がさらに顕著で、どれだけ収益を上げても人件費や医療経費の増加に追い付かず、国は本気で病院を潰す気のようです。今年ものほほんとは生きていけないようです。

昨年の５月の定期総会で令和６年・７年度の讃樹會会長として信任いただきました。所信表明にも書かせていただきましたが、同窓の皆様方に母校に今一度注目していただき、ご支援いただくために、大学を取り巻く環境がどうなっているか、大学の内部で何が起きており、何をなさなければならないか、それを周知するのは学内にいる人間の責務だと考え、会長に立候補させていただきました。昨年は支部会の開催を奨励させていただき、中部支部会、岡山支部会には西山医学部長とともに参加させていただきました。関東支部会にはOSCEの関係で出席がかないませんでしたが、今年２月の関西支部会には参加予定です。香川県外のひとりでも多くの同窓の方々と直接お会いし、言葉を交わし、母校への想いを改めて醸成いただければと願っております。皆さんの利便性を高めるための名簿作成や、若い人たちの参画を促すための学生部会の設立など、同窓会が末永く活動できる、そのような仕組みを少しずつですが作っていきたいと思います。

中部支部会に参加した際に、スライドを用いてお話をさせていただきました。その際に、土曜日の朝５時57分の写真をお見せしました。西山医学部長と私の車が２台、エレベーターの表示は７階（西山先生の薬理学の部屋がある）を示しており、卒業して30年たって、毎朝このような風景を目にする生活になるとは夢にも思っていませんでした、とお話ししましたが、その写真を見て寄付を決意した、と言ってくださった同窓生もいました。心から有難いことだと感謝しております。今年も全力で大学ならびに同窓会の活動に邁進してまいります。皆様方のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

ニュースの窓

第14回讃樹會市民公開講座　開催報告　令和６年11月２日（土）、16：00～17：00

講師　星川広史教授

恒例となった讃樹會市民公開講座が、11月２日土曜日、サンポート高松で開催され、今年も定員100名の会場が一杯になる盛況ぶりでした。県民のみなさんの関心の高い健康課題や最新の医療情報について、正しい知識を広く周知啓発することを目的に、香川大学の協力のもと開催しているもので、この日は季節はずれの台風の影響で朝から大雨でしたが、開会時間に合わせたように雨も上がり、無事第14回となる講座を開催することができました。

星川洋一副会長（10期生）の開催の挨拶に引き続き、濱本龍七郎名誉会長（１期生）が座長となり、講師である香川大学医学部耳鼻咽喉科教授星川広史先生（５期生）のご紹介のあと、「耳鼻科は、みみとはな？いえいえ、奥が深いですよ～人生100年時代の楽しい生き方お教えします～」と題した講演となりました。

まず、耳鼻咽喉科・頭頚部外科が対象とする領域や主な疾患について、わかりやすく解説いただいた後、ヘレンケラーの「盲目は人と物とを隔てる、難聴は人とひとを隔てる」ということばを引用して、コミュニケーションの手段としての聴覚の重要性について、認知症との関連も含めご説明いただきました。次に、嗅覚について、匂いと記憶には強い結びつきがあり、聴覚同様、認知症との関連が指摘されていること、味覚、嚥下は美味しく食べるという人間にとって極めて重要な機能に大きくかかわっていることなどのお話がありました。

また、匂いサンプルによる嗅覚刺激法や嚥下体操について、実際に参加者に試してもらうなど、明日からでも具体的な予防行動が実践できるよう準備・工夫された講演でした。

講演の最後は、今後、急激な人口減少、高齢化社会を迎えるにあたり、地域包括ケアシステムの構築が不可欠なこと、そのためには、まちづくりの視点が必要なこと、みんなが自分事としてとらえ、60歳からの教育、地域とのつながり、世代を超えたつながりが重要であるなど、耳と鼻にとどまらない、大変示唆に富む講演となりました。

その後、会場からの多くの質問にも丁寧にお答えいただき、また講演終了後も質問者が列をつくるなど、耳鼻科領域の関心の高さがうかがえ、大変有意義な講演会となりました。

最後に、星川から、講師と参加者へのお礼、今後も大学と連携し、香川県の地域医療に貢献していくとともに、このような講演会も続けていく旨挨拶し、盛会の内に終了しました。

讃樹會副会長　星川洋一
（平成７年卒・10期生）

受付風景

座長　濱本名誉会長

星川副会長

熱心に聴講する参加者の皆様

匂いサンプル

2024年度の医師臨床研修マッチング結果について　令和６年10月24日

卒後臨床研修センター
センター長　安田　真之（平成９年卒・12期生）

令和７年度から医師になる医学科生らが臨床研修病院を選ぶ「2024年度マッチング結果」が、10月24日に公表されました。

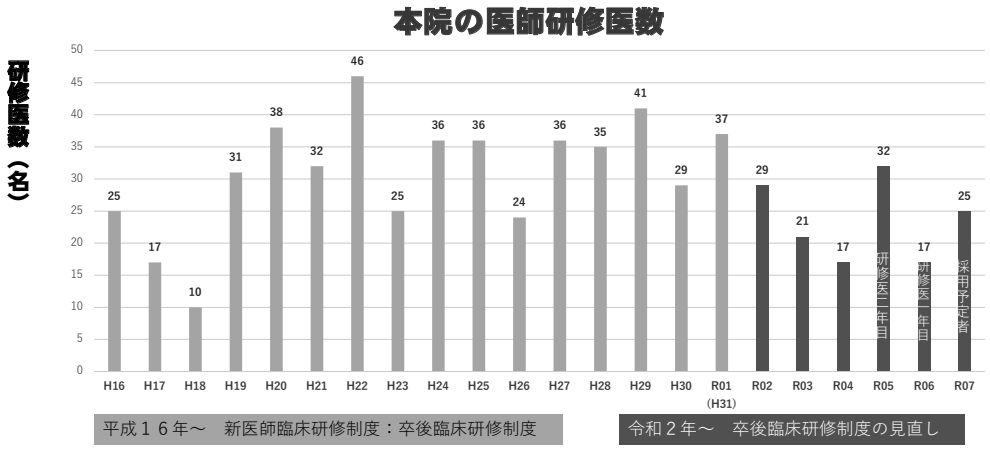
本院のマッチ者数は、MANDEGANプログラム（19名）および小児科プログラム（２名）、の計21名となり、２次募集４名とあわせて次年度の採用予定者は25名です。

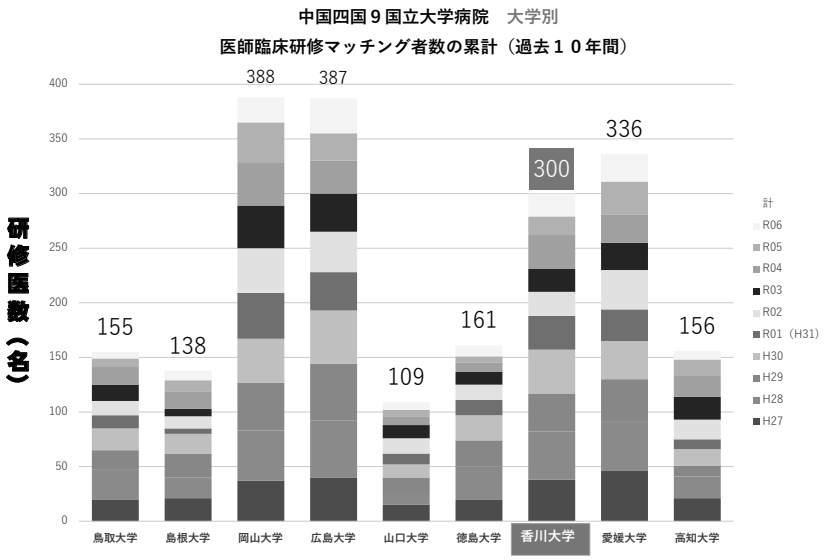
本院への想い・期待を抱いてくれた皆さんが、来春より本院で研修開始予定であることを大変嬉しく思います。

令和２年度から、卒後臨床研修制度が大幅に変更となりました。必修診療科での研修期間が増え、新たに外来診療・チーム医療の実践など必修項目も設定されています。また、医師だけでなく看護師等の多職種による研修医評価も必要となりました。院内スタッフの皆様にも、研修医指導へのご理解とご協力をお願いしております。

本年度のマッチング結果は、地方国立大学病院では、研修医確保が大変厳しい状況に陥っており、地域医療を担う医師教育、育成に多大な影響を及ぼすことが危惧されております。今後、多くの医学生からキャリアアップのファーストステップとして本院が選択される為に、医療の社会的ニーズの変化に対応した研修を提供することが、さらに重要となると考えています。

医学部教育センター、臨床教育研修支援部が一気通貫体制で医師養成に臨むだけでなく、地域全体のムーブメントとして皆様にも研修医教育に関わって頂き、研修医が医師としてのキャリアアップに夢を持てる大学病院でありつづけることが大切と考えます。讃樹會会員の皆様におかれましても、引き続き研修医育成にお力添えの程よろしくお願い申し上げます。





医学科ホームカミングデー開催報告　令和６年10月13日

～学生とともに感謝を込めて～

香川大学医学部長　西山　成（平成５年卒・８期生）

昨年10月より医学部長を拝命しております平成５年卒・西山　成でございます。讃樹會の皆様におかれましては、平素より母校・香川大学医学部に対してはもとより、個人的にも大変お世話になっております。いつも多大なるご支援をいただいておりますことを、この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。さて、この度、「ホームカミングデー2024」を開催させていただきましたので、この場をお借りして簡単にご報告申し上げます。

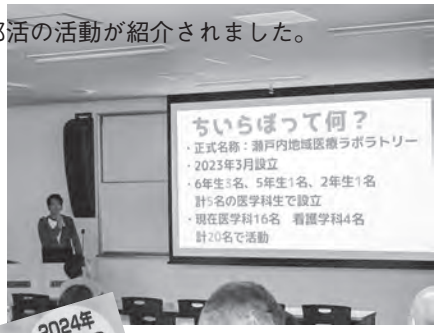
ホームカミングデーとは、香川医科大学・香川大学医学部医学科の卒業生やご退職された教職員だったOB/OG、さらには在校生のご家族の皆様に対し、「香川大学医学部に戻って来ていただく日」としてのイベントとして位置付け、星川・讃樹會会長とともに香川大学医学部祭の開催中の2024年10月13日に医学部・三木キャンパスで開催いたしました。初めての開催であり、連絡の不備など、至らぬところも多々あったのではないかと思いますが、当日は50名近い方々にご参加いただきました。そして、私と星川先生のご挨拶に続き、再開発で新しくなった講義棟を開放し、在学生のボランティア団体や部活の活動報告などを実施させていただきました。学生からは、「来年はもっと準備をしておきたい、特に、学祭に来てくださった先輩の皆様に感謝を伝えるためのイベントを企画したい！」と前向きな意見をたくさんいただいております。在学生も卒業された先輩方が自分たちを見に来てくれてとても嬉しかったようで、このようなふれあいを通じ、学生たちが香川大学医学部で学ぶことに誇りを抱き、愛校心を高めてくれているものと確信しております。

医学部キャンパスも約50年が経過し、昨年度から６か年計画で改修工事に着手しております。私はこれを医学部再生の契機とすべく50周年記念事業と位置付け、これまでの50年を振り返りつつ、これからの50年を見据えてまいりたいと固く決意しております。この半世紀で子どもの数は約半分となり、「四国に大学は一つでよい」といったような意見が主流になっております。そのような時代の流れの中で生き残りをかけ、香川大学医学部において医学を学ぶのに最適な環境を実現していく所存です。そのためには、皆様方のお力添えが何よりも必要ですので、母校への愛情を何卒宜しくお願い申し上げる次第でございます。また卒業生の皆様に直接お目にかかれますことを心より楽しみにしておりますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

P.S. 医学部長ブログや再開発ホームページも公開しておりますので、是非ご覧くださいませ
https://nishiyama-akira.hatenablog.jp
https://www.med.kagawa-u.ac.jp/~redevelop/

西山医学部長

学生のボランティア団体や部活の活動が紹介されました。



参加者の皆様

星川会長

講義棟１Ｆ101教室

小原英幹教授就任パーティーに参加して　令和６年９月15日

讃樹會名誉会長　**濱本龍七郎**（昭和61年卒・１期生）

令和６年９月15日に高松国際ホテル瀬戸の間にて、香川大学医学部消化器・神経内科学小原英幹教授の就任記念祝賀会がありました。

会に先立ち、小原英幹教授が「人・心・夢が集う教室を目指して」と題して、特別講演をされました。前教授の正木勉先生が座長をされ、相変わらず流ちょうな語り口で、小原教授誕生の喜びをまじえご略歴を紹介され、特に医学部で初めて母校出身の教授から母校出身教授が誕生した事を強調されました。

171名の先生が参加され、KSB瀬戸内海放送アナウンサー山下佳乃様の司会進行で始まりました。

開会の辞を香川大学医学部消化器・神経内科学同門会会長　伊藤哲史先生、来賓祝辞は、香川大学学長　上田夏生先生、香川医科大学名誉教授　西岡幹夫先生、山梨県立病院機構理事長　東京大学名誉教授　小俣政男先生、一般社団法人日本がん予防学会理事長　石川秀樹先生が述べられ、香川大学医学部消化器外科学教授岡野圭一先生が祝辞と合わせて乾杯の音頭を取られました。

挨拶される小原英幹教授

そして、祝宴が始まりました。余興として、小原教授の出身地である徳島県の阿波踊りを多くの先生が楽しく踊られました事が印象的でした。

再び来賓祝辞として、香川大学医学部長西山成先生、香川大学医学部附属病院病院長門脇則光先生が述べられました。

花束贈呈の後、最後に小原英幹教授より謝辞として、教授就任に当たっての感謝と喜びと大学の期待に応える誓いを述べられ、閉会となりました。

私（濱本）の感想として、消化器・神経内科学は医学部最大の教室であることは言うまでもないことがこの会を通して確認でき、香川県の医療の中心である事を参加者全員の皆様に期待されていると思いました。今後益々のご発展を希望申し上げます。

R6子宮頸がん撲滅ライブ&Women's Health awarenessの実施報告　令和６年７月28日・29日

高松市保健所　藤川　愛（平成13年卒・16期生）

今回は、令和６年７月28～29日に開催した子宮頸がん予防イベントの取り組みをご紹介させていただきます。平成29年から夏休み前の時期に子宮頸がん予防イベントを開催し、今回６回目の開催であり、讃樹會様には毎年ご後援を頂いています。今年は、HPVワクチンのキャッチアップ世代の最終年度でもあり、強力な講師として７期生りんくう総合医療センター産婦人科部長のコウノドリ荻田和秀先生（７期生）と、大阪大学感染症医の忽那賢志先生（リアルくつ王が到来！）が来てくれる事になり、前夜祭ライブにも力をいれることになりました。

小林英治先生の演奏

前夜祭（７月27日）の子宮頸がん撲滅ライブには、Gt小林英治先生（12期生）がオープニングアクトを飾ることになり、Bs光中弘毅先生（８期生）リーダーの７～10期生（Vo山口真弘先生（７期生）、Gt的場謙一郎先生・Pf松本亜紀先生（８期生）、Ds八代雅也先生（10期生））に、Tb横井徹先生（３期生）のトロンボーンも加わった「池戸倶楽部Unlimited」が爆風スランプのコピーバンドに挑戦すると宣言！またPf藤井聡先生（５期生）、Vo田中民江先生・Bs政田哲也先生（７期生）のジャズ演奏ありと豪華メンバーがそろいました。

光中弘毅先生リーダー
「池戸倶楽部Unlimited」の演奏

当日蓋を開けてみると100名以上と想定以上にたくさんの方に来ていただいて盛り上がりました。会場には岡野圭一先生や村松明子先生（７期生）、伊藤美奈子先生（９期生）、軽音部OBからは山下資樹・彩奈先生夫妻（13・12期生）や松原あい先生（12期生）にも応援に来て頂きました！

葡萄塾での打ち上げ写真（歓談中）

翌日のメインイベントには、医学生ボランティア７名（６年生の加藤拓海さん・伊達翼さん、４年生の宮下祐実さん、３年生の大平大耀さん・斎藤慶寅さん・瀧川和さん、２年生の伏見燿さん）にご参加頂き、ドーム広場でチラシの配布や、ソウキくんの着ぐるみを着て来場者へおもてなし頂きました。

山下彩奈先生ら軽音部OB
メンバーの集合写真

講演会では、講師の忽那先生から性感染症と梅毒の正しい知識伝授して頂き、荻田先生からは漫画「コウノドリ」にこめた未来へつなぐ産科医療やワクチンを含めた子宮頸がん予防などわかりやすくご教授頂きました。これまで以上に多数の方に来てもらい、若い世代だけではなく母娘や家族連れでの参加者もおられ、幅広い年齢層の方に正しい情報の啓発を行うことができました。

次年度も、幅広く若い世代のがん予防も含めての啓発活動の展開に努めていきたく、讃樹會の皆様のご賛同のほど何卒よろしくお願いいたします。

（追記：令和６年12月現在、高松市のキャッチアップ世代の接種率は概ね５割近くの見込みです。関係者の皆さまのご尽力に深謝です）

Women's Health Awarenessイベントポスター

荻田先生、忽那先生と学生さん達との集合写真

2024年度研究助成金/研究奨励金　受賞の言葉

研究助成金受賞のことば

香川大学医学部　消化器・神経内科学
藤田　浩二（大学院平成27年修了）

この度は令和６年度讃樹會研究助成課題に採択して下さりまして、誠にありがとうございます。本助成の支援を受けて、私どもの研究課題「肝細胞癌のマルチキナーゼ耐性獲得機構の解明」を大きく発展させることができるのではないか、と期待しております。讃樹會関係者の皆様および御審査いただきました先生方、本研究の草案に関わり、ご指導くださいました先生方には、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

肝細胞癌は全身の種々の臓器の悪性腫瘍の中で６番目に死亡数が多いとされています。そして、本研究課題で取り上げたマルチキナーゼ阻害薬は、肝細胞癌の全身化学療法において、第２選択薬に位置付けられています。近年、悪性腫瘍に対する全身化学療法の分野では、がん細胞が腫瘍免疫から逃れる機構を阻害する、いわゆる免疫チェックポイント阻害薬が登場し、全身化学療法の治療戦略が見直されています。しかし、肝細胞癌に対する免疫チェックポイント阻害薬の奏効率は、現状では30%程度です。また、自己免疫疾患の合併例においては、免疫チェックポイント阻害薬の使用が禁忌とされています。そのため、マルチキナーゼ阻害薬は現在においても尚、肝細胞癌の全身化学療法における臨床の最前線において、主要な地位を占めています。

本研究課題においては、マルチキナーゼ阻害薬に対して肝細胞がんが耐性を獲得する機構を解明すべく、miRNAの網羅的解析だけでなく、タンパク質の網羅的解析も進めています。私どもは一連の解析の過程で、ヒスチジン代謝酵素の一つであるFormimidoyltransferase cyclodeaminase（FTCD）の発現に着目しました。このFTCDという酵素は、肝細胞がんの細胞株が、あるマルチキナーゼ阻害薬への耐性を獲得するとその発現が抑制され、他のマルチキナーゼ阻害薬でこの細胞株の増殖を抑制すると、FTCDの発現が回復する、という現象が明らかになりました。幸い、この知見は2024年８月にBiochemical Pharmacology誌上で報告することができました。

今後の展開についてですが、FTCDがヒスチジン代謝酵素であることから、まずはマルチキナーゼ阻害薬投与時の肝がん細胞内のアミノ酸プロフィールの変化を明らかにしたいと考えています。また、上述のタンパク質の網羅的解析を見直した結果、マルチキナーゼ阻害薬の投与により、がん細胞の形質膜の成分であるGlucosylceramideの発現変化が認められていました。そこで、形質膜の構成成分である、リン脂質の網羅的解析を行いたいと考えております。

最後になりますが、この助成金を有効に活用し、より良い研究成果が報告できるよう、日々精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

研究奨励金受賞のことば

香川大学医学部　小児科学
横田　崇之（平成28年卒・31期生）

この度は、令和６年度讃樹會研究奨励金をいただき、誠にありがとうございます。本奨励金は、私の研究活動における大きな励みとなり、今後の研究活動にさらに精進するための貴重な支援となります。讃樹會会員の先生方、ならびに選考委員会の先生方には心より感謝申し上げます。

私は、2016年に香川大学医学部を卒業後、香川大学小児科で新生児領域を含めた幅広い臨床経験を積ませていただきました。大学院に入学当初は、日下教授のご指導のもと、諸先輩方が築き上げた香川発の新生仔豚仮死モデルを用いた研究に従事させていただきました。非常に臨床に直結した実験現場に驚いたことを今でも覚えており、同時に動物実験の面白さを実感することができました。このモデルでは、新生仔豚に対する低酸素虚血負荷後の水素ガス吸入併用により、低体温療法単独に比して運動機能改善効果、脳循環酸素代謝変化への改善効果、痙攣軽減効果が高いことがすでに報告され、重要な成果を上げています。

私自身には「水素ガス吸入療法による早産児慢性肺疾患の新規治療法の開発」がテーマとして与えられ、現在まで研究活動を継続しております。新生児、特に早産児は酸化ストレスや炎症性サイトカインに曝されることが多く、慢性肺疾患やその他の重篤な合併症を生じます。水素ガスが持つ抗酸化作用および抗炎症作用は、こうした病態に対して予防・治療効果を発揮することが期待されます。

本研究では、岡山大学や大阪医科薬科大学など他大学と共同しながら、bleomycin投与による新生児肺障害ラットモデルを確立し、水素ガスの効果について病理学的解析や呼吸機能評価を進め、その可能性を探っていきたいと考えています。また、水素ガスは肺以外の主要臓器にも有効であり、新生児領域で重要な壊死性腸炎や未熟網膜症などの合併症にも全身的な改善効果を示す可能性があり、今後新生児医療における革新的な治療法の開発につながると確信しています。

最後に、このような貴重な機会をいただいたことを深く感謝するとともに、今後も一層精進し、貴同窓会のご支援を有効に活用して、医療と研究の発展に寄与できるよう努めてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどを賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
2025年度研究助成金／奨励金応募要領

1．研究助成の目的

学内外で活躍している同窓生の行っている研究活動をサポートし、それらの社会への還元を促進すること。

2．助成対象者

研究助成金：香川大学医学部（旧香川医科大学）医学科同窓会の会員で卒後25年以内の者で申請時より遡って５年間（準会員期間を含む）の会費を納入している者。

研究奨励金：香川大学医学部（旧香川医科大学）医学科同窓会の会員で卒後15年以内の者で申請時より遡って５年間（準会員期間を含む）の会費を納入している者。

尚、両者を同時に応募することはできない。

研究助成金は、１回受賞した後はインターバルを３年置いて再度申請が出来る。

研究奨励金は、１回の受賞をもってその後の申請は出来ないこととする。

3．助成期間　１年間

4．助成金額

研究助成金：1,000千円以内を１名。

研究奨励金：500千円以内を１名。

5．選考方法　外部評価者による厳正な審査を経て、讃樹會理事会で決定する。

6．研究成果の報告義務

（1）研究助成を受けた方は、助成研究の結果（助成研究報告書）と研究助成金の使途明細（助成研究会計報告）を、助成２年後の2027年９月１日までに提出する。

（2）助成研究の成果を助成研究発表会で発表する（日時・形式については別途連絡）。

（3）助成研究の成果は、原則として学術誌に投稿すると共に、別刷一部を提出する。

（4）過去において助成された事績がある応募者は、その助成課題に対して学術誌に投稿（受理を含む）しておれば、別刷一部を添付。ただし、既に提出済みの別刷はその必要はない。論文に讃樹會への謝辞が記載されていないものについては、受け付けない。

（5）以上の報告義務を怠った場合には、助成金の返却を求める場合がある。
尚、やむを得ず申請者が手続きを完了できない場合には、共同研究者によってすべての報告が代行されるものとする。またこのような事が生じた場合は、総合的な責任は推薦者に発生するものとする。

7．申請手続き

（1）申請書　讃樹會所定の申請書「第１号～第８号様式」を書面で「書留便」などの確実な方法で提出のこと。提出部数は原本各１部、複写各４部。

（2）受付期間　2025年２月１日～2025年４月30日（締切日必着）。

（3）提出先

〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750－１
香川大学医学部医学科同窓会讃樹會　担当　柚山
TEL・FAX：087-840-2291
E-mail：sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp
URL：https://dousoukai.site/sanjukai/

8．選考結果の通知・公表

結果は文書で本人に通知する（2025年８月の予定）とともに、会報に受賞者による謝辞を掲載する。尚、提出書類は返却しない。

9．守秘に関する留意点

特許、守秘義務を交わした協同研究である等の理由で守秘が必要な場合は、上項６．研究成果の報告義務及び８．選考結果の通知・公表について勘案し、申請者の自己責任において応募すること。

理事会議事録

令和６年度第３回理事会　令和６年11月26日（火）19：30～20：00　WEB開催

当日参加17名及び委任状16名による計33名の参加となり、全理事59名の過半数（30名）以上により理事会が成立した。

１．会員名簿作成について

2011年以降、会員名簿が作成されていないため、会員相互の交流の利便性を上げるためにも、会員から名簿作成が希望されており、他大学の名簿発行状況を資料として、星川会長より説明があった。「業種的に医師の職場はインターネットなどで概ね調査可能であるため、個人情報として守秘されていると言い難いところであり、勤務先は基本的に開示でも問題ないと考えられるが、全ての掲載項目の開示について個人の希望を確認する。

形式としては、冊子体は作成の度に印刷費や輸送費で費用がかかるという問題がある。時代的にはWEBでセキュリティを万全にした上で、パスワードで入って閲覧、検索するという形が望ましいと思う。そのため業者に発注する必要があり、今後、費用やシステムの詳細を比較検討して調べていきたい。」

WEBでの会員名簿作成について、理事会の賛同があった。

２．令和６年度（2024年度）第２回国外留学助成金の審査・決定

西内学術局長に代わり星川会長から、今回、本城晴紀先生（平成23年卒）１件の申請があり、１次審査上、全て基準を満たしていることが説明された。これを受けて理事会による２次審査が行われ、１件の限度額である250,000円が交付されることが決定した。

３．学生部会の設立について

星川会長から学生部会設立の意図について、「組織は、若い人材の参画がないと先細りしてしまう。学生の時から同窓会の存在を知り、時には何らかの形で同窓会の活動に参画してもらうよう、学生部会という形で何名かの学生さんを任命したい。学生に関わる事案の際には執行部会や理事会にも参加したり、あるいは支部会への参加などの形で今後進めていきたい。学生部会に任命する者は、学祭の実行委員長などの役職経験のある学生が引き継いでいく形を考えている。」と説明があり、満場一致で理事会として賛同となる。

４．病院見学サポーターについて

星川会長から、「ポリクリの５、６年生が研修先に考える病院に卒業生が勤務している場合、学生の来訪に際し、サポーターとして、学生の対応をしてくださるような方を調査したいと考えている。まだ具体的な内容は検討段階であるが、全国各地におられる同窓の先生方が、何かあった時には助けていただくこともできるということを学生たちに周知できればと思う」と構想を話された。

これに対し、卒後臨床研修センター長の安田先生から、「センターは卒業生に残ってほしいと向き合っているので、３年目以降とかキャリアを積んだ時に帰ってきやすいような環境を作ると言う意味でこういうシステムにおおまかには賛成する、具体的な運用方法については今後相談していきたい」との意見があった。

大西議長から、「各病院は様々な大学出身の先生方の集まりであり、偏らず均等に対応しているので、よほど運用をきちんとしなければ対応しにくいかもしれないと思う。」との意見があり、星川会長が、いろいろな懸念があると思うので少し時間をかけて進めていきたいと応えた。

理事会として賛同された。

５．新棟への事務局移転について

同窓会事務局は、来年４月に中庭に完成する新棟の一階に移転する。今後は、ホームカミングディを始め、卒業生が来学する際には、同窓会事務局にも立ち寄るというケースが増えてくると思われる。建物や部屋が新しくなるこの機会に、事務局も、今後はもう少し来た方がくつろげるようなスペースを作るための整備をしていきたい。それに伴い椅子や机、パソコン機器などの費用が発生することについて許可いただけたらと星川会長から説明があり、理事会の賛同があった。

６．事務局事務員の増員について

同窓会事務局は、長年、事務員１名の状態が続き、それをサポートして継続性を持たせるための増員が必要であったが、なかなか実現しないまま現在に至っている。増員に伴い一時的に予算が増えることが見込まれるが、継続性を考えた上では必要だと思われる。事務員を増やす方向で議論してほしいと安田事務局長から説明があり、理事会の賛同があった。

７．その他

①医学部開講50周年記念特定基金（医学部再開発）寄附について

令和６年度第１回理事会で決定した寄附金1000万円が讃樹會として10月に滞りなく寄附されたことについて星川会長から報告された。来年４月30日（予定）の新棟竣工式典の際に、同窓会に対して医学部より何らかの形でお礼の言葉がある予定である。

②支部会への学生参加への支援について

11/24開催の岡山讃樹會へ初めて学生の参加があり、学生に対して懇親会援助費を支援する件について直前に執行部会のメール審議で了解された。今後も、学生が支部会へ参加する場合も考えられ、学生を対象に加えた懇親会援助規定の改訂案を次回の執行部会・理事会で審議するよう星川会長から要望があり、理事会で賛同された。尚、次回の審議までに開催される支部会に学生の参加があった場合は、岡山讃樹會と同様に援助をすることとなった。

③林英生先生から名誉会員のご辞退について

令和６年度第２回理事会（令和６年８月６日（火）WEB開催）において、名誉会員板野俊文先生のご推薦があり、香川医科大学微生物学初代教授林英生先生の讃樹會名誉会員就任が承認されたが、その後、９月に入り、林先生御自身から、ご病気を患っているため、名誉会員をご辞退されたいとの手紙が届いたことが星川会長から報告され、理事会としてご辞退を承知させていただくこととなった。

特集

外科手術基本手技講習会のご案内

香川大学医学部附属病院 呼吸器外科
三﨑　伯幸（平成12年卒・15期生）

「外科は面白い」。一見すると軽く感じられるこの言葉には、実は外科医療の多面的な魅力が凝縮されています。命を救うという崇高な使命を果たす中で、外科には職人的な楽しさ、創造的な要素、そして自身の成長を実感できるやりがいがあります。しかし、この魅力を学生や研修医にしっかりと伝え、技術を習得してもらうためには、実際に触れ、経験する場が欠かせません。そのため、シミュレーション教育が重要な役割を果たします。

しかし、医学教育の現場では、各科や個人の外科医が十分な時間と場所を確保して、細やかな指導を行うことは容易ではありません。このような背景のもと、2022年に矢島教授が当科に赴任して以来、「外科手術基本手技講習会」という取り組みがスタートしました。

講習会の概要

この講習会は、研修医や学生を対象に、外科の基本手技である「切る」「縫う」「結ぶ」を中心に技術指導を行うものです。開催頻度は春と秋の年２回で、各回には多くの医学生や研修医が参加しています。

指導にあたるのは、消化器外科、心臓血管外科、小児外科、乳腺内分泌外科、呼吸器外科の多岐にわたる分野の外科医たちです。講師陣は20～30名に及び、それぞれが自主的に参加して熱心に指導を行っています。この講習会は、講師が持つ実践的なスキルを直接学べる貴重な機会となっており、多くの参加者から高い評価を得ています。

成長する講習会

当初は23名の参加者で始まったこの講習会ですが（図１）、回を重ねるごとにその人気は高まり、第６回となった現在では毎回40～60名が参加する大規模なイベントへと成長しました（図２）。講習会では、１人の講師が２人程度の受講者を担当する形が基本ですが、実際にはほとんどが１：１の指導となっています（図３）。この形式は非常に効率的で、短時間で確実に技術を習得するのに効果的です。

さらに、毎回実施されるアンケートでは、参加者の満足度が非常に高く、95～100%の受講者が「満足した」と回答しています。また、講習会は３時間という

図１：初回の開催で23名の参加に、25名の講師と充実の内容

図２：参加者約50名、講師35名の総勢85名まで成長

長丁場ですが、10を超えるブースを回ってさまざまな手技を体験するうちに、時間が過ぎるのもあっという間だと感じる参加者が多いようです。

参加者の中には、「時間が足りない」「もっと長時間開催してほしい」「年２回では少ない」といった意見を寄せる人も多く、講習会の機会をさらに増やしてほしいという声が挙がっています。

図３：楽しそうにマンツーマン指導をする矢島教授

講師陣の熱意と課題

この講習会のもう一つの大きな特徴は、講師陣の熱意にあります。講習会中、講師たちは若手の熱気に触発され、皆一様に生き生きとした表情で指導にあたっています。実際、講師自身もこの講習会に参加することで得られる満足感が高いと感じており、アンケートでは「若手と交流する良い機会」「教えることで自分自身も学びがある」といった感想が寄せられています（図４）。

図４：豪華な講師陣
（左が受講生、右が講師陣で縫合指導）

一方で、このような大規模な講習会を支えるのは容易ではありません。講師陣は休日を返上し、準備を含めると半日以上にわたる負担を抱えています。このような状況を考慮すると、年２回以上の開催は現時点では難しいのが現状です。関係者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

外科医療の未来のために

外科医療は「職人技」ともいえる技術が求められる分野であり、その技術を次世代に継承していくことは非常に重要です。この講習会は、若手医師や学生にとって貴重な経験の場であると同時に、講師たちにとっても自身の技術を振り返り、再確認する機会となっています。

また、外科医療の本質的な楽しさや達成感を体感する場として、この講習会は大きな役割を果たしています。今後もさまざまな工夫を重ねながら、この取り組みが継続されることを期待しています。参加者と講師の双方にとって学びと成長の場となるような取り組みを継続し、外科医療の素晴らしさをより多くの人々に伝えていきたいと思います。

興味を持たれた方は、次回の講習会への参加をぜひご検討ください。外科の魅力に触れる絶好のチャンスです！

国外留学助成金　受賞の言葉

令和６年度第２回国外留学助成金

本城　晴紀（平成23年卒・26期生）　東京大学医学部産婦人科学教室

留学先機関：Dana-Farber Cancer Institute, Harvard University
留 学 期 間：2024年10月～2026年９月
研 究 課 題：「３次元ゲノム構造に着目した卵巣がんの病態解明および新規治療標的の探索」

【謝辞】

この度は国外留学助成金にご採択頂き、讃樹會の皆様に心より御礼申し上げます。私は婦人科悪性腫瘍を専門とし、東京大学大学院医学系研究科にて、DNA損傷応答およびDNA:RNAハイブリッド（R-loop）制御に関わる転写補助因子の研究で学位を取得しました。2024年10月より、米国のDana-Farber Cancer Instituteに所属し、上記研究課題に従事しています。指導を受けるSarah Johnstone先生は、がんにおけるクロマチンの空間的再編成に関する画期的な知見を報告した３次元ゲノム研究の先駆者であり、その下で、同僚やHarvard関連施設との連携にも恵まれた環境で学んでいます。本留学を通じて、予後不良な婦人科がんの克服に貢献できるよう尽力してまいります。末筆ながら、この場をお借りして、本助成のご推薦を頂きました東京大学医学部泌尿器科学教室の山田大介先生、高松赤十字病院高度生殖医療センター長の石橋めぐみ先生に、深謝申し上げます。

2024

教室便り

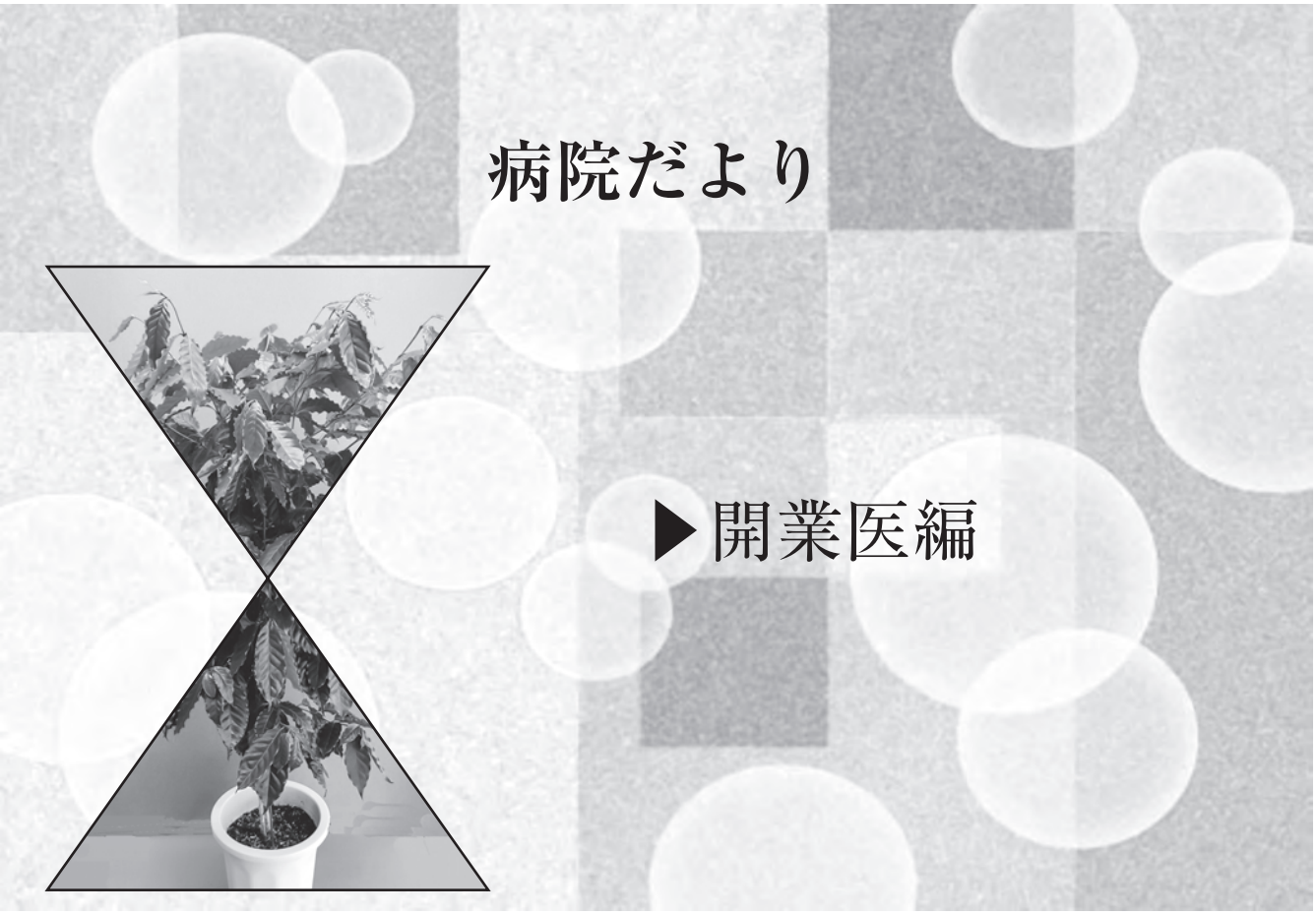
本稿は前号（令和６年９月発行）の教室便りに合わせ同年７月にご入稿いただいておりましたが、讃樹會事務局の見落としのために掲載できませんでした。
自律機能生理学教室様を始め、皆様に深くお詫び申し上げます。

自律機能生理学

自律機能生理学は、基礎研究成果をベッドサイドへ展開する“トランスレーショナル生理学”を旨に基礎研究に取り組んでいます。2024年度から有志の医学部学生が研究活動に加わり、教授１名、准教授１名、助教２名、研究員２名、大学院生２名、事務補佐員１名の体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。

研究の主要なテーマは老化です。血液凝固系との関係で老化の仕組みを解き、新しいアンチエイジング戦略を提案すべく研究に励んでいます。加齢とともに凝固活性が亢進することはよく知られていますが、逆に凝固系の亢進が老化を促進するとする仮説を、動物実験と培養細胞実験により検証しようとしています。

教育では、生理学Ⅱ（医学科２年次）、生理・薬理実習（医学科３年次）と研究室配属が主担当科目です。研究室配属の最終日に開催する成果発表会では、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問することで、厳密な科学的思考法・素養の育成を実践しています。科学的素養とは、事実（結果）と意見（考察）を明確に区別し、事実から論理的に意見を形成する能力と取られています。この思考法の鍛錬は、卒業生がいずれの道を歩んだとしても医療プロフェッショナルの基盤として生涯役に立つと期待しています。　（平野　記）



名古屋栄駅前ふくはら大腸肛門外科・消化器内科（愛知県名古屋市）

院長　福原　政作（平成７年卒・10期生）

「専門性は高く、敷居は低い」日帰り肛門手術クリニックを目指して

名古屋市中心部栄に大腸肛門科クリニックを開業している10期生の福原政作と申します。

昨夏、讃樹會中部支部会に出席し旧交を温めたところ、なぜか私のようなマイナー人間に白羽の矢が立ち、この度同窓会誌に寄稿する機会を得られました。お声をかけていただいた星川会長、谷広報局長にこの場を借りて御礼申し上げます。

私は平成７年卒業後、郷里の名古屋に戻り、30年前はまだ珍しかった市中病院でのローテート研修の後名古屋大学第２外科に入局。10年間消化器外科医としてすごした後、たまたまの縁で肛門外科医となりました。15年間専門病院で臨床に明け暮れ、50歳を迎えて一念発起。ニーズはあるのに実際には少ない「痔の日帰り手術」を専門としたクリニックを自身で立ち上げたい、という欲にかられて清水の舞台から飛び降りた次第です。

ニッチで特殊な専門科のため、立地と認知広告戦略に的を絞り、駅乗降者数、テナント家賃相場、駅近競合有無などを検討した結果ターミナル駅近の現在地に落下傘開業しました。看板や紙媒体の広告はゼロ。代りにWebマーケティングに全振りしスタートしました。よりによって開業とコロナ禍が重なり当初２年は辛い日々が続きましたが、まあ継続すればなんとかなるものです。幸いに良いスタッフにも恵まれ５年経った現在は忙しくも楽しく充実した日々を送れています。

肛門科ということもあり患者の羞恥心・不安を少しでも和らげて集患につなげようと、HPに院長自身の

プロフィールを細かく載せ自己開示を積極的にしたおかげか、香川県のみならず四国出身の患者さんがよく来院してくれます。好きなうどん屋の話や高松地元ネタで盛り上がることもありうれしく思っています。

さて、せっかく貴重な寄稿の機会ですので同窓生の皆さまに肛門科の現状につき少しお伝えしたいと思います。

昨今外科医減少問題が叫ばれていますが、肛門外科医の減少はさらに危機的です。例えば専門医の数で言えば、肛門科専門医は大腸肛門病学会認定で400名足らず。一方私のもう一つの専門である消化器内視鏡における専門医数は１万８千名。単純計算でなんと45倍です。しかも若い専門医が極端に少ない。なぜ肛門科医は絶滅危惧種になってしまったのか。現在大学医局で肛門科を修練することはほぼ不可能になっています。各地にある肛門科専門病院にたまたま医局人事で赴任するか、医局を外れて直接門を叩くしかないのが現状です。専門病院では多数の症例を浴びるように経験できるため比較的短期間で成長できますが、医局のメインストリームから外れないと十分なキャリアを積めません。しかも最近話題の「直美」のように研修医からいきなり肛門科医にはなれません。必ず一定期間外科医の修練が必要です。つまり肛門科医になるルートが極めて限られているため減少の一途を辿っているわけです。

愛知県では若い肛門外科医が慢性的に不足しています。おそらく四国など他の地方でも同様と思います。

同窓生で肛門外科に興味のある若い先生がいらっしゃれば、遠慮なくご連絡をください。現在私の知る知識の範囲内で、肛門科医になるためのルートなど情報をお伝えし、一人でも肛門外科医を目指す人が増えてくれる一助になれば幸いです。

以上、率直に言えば大学で臨床・研究・教育に熱心に携わる諸先生方からすれば私のキャリアは何度か道を外れており、決して褒められたものではありません。しかし私が医師になった30年前と比べるとキャリアデザインの多様性は増しています。

こんなキャリア形成のケースもあるんだ、と参考にしてもらえればうれしいです。

最後に、香川大学と同窓生の皆さまの益々のご発展を名古屋からお祈りいたします。

◀頼れるスタッフとともに

いなもと耳鼻咽喉科（香川県高松市）

院長　稲本　隆平（平成15年卒・18期生）

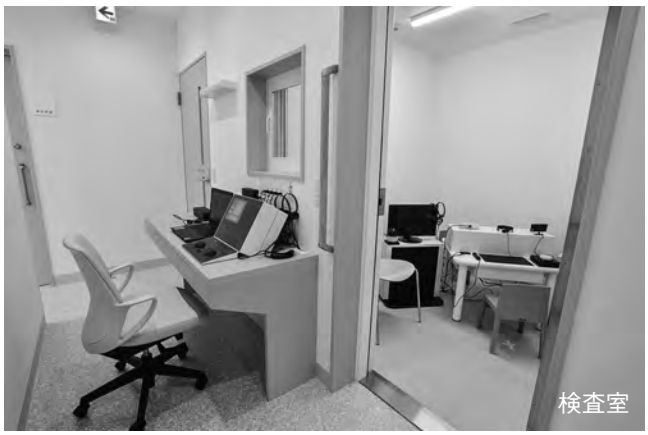
開業を振り返って

令和２年９月、高松市一宮町に「いなもと耳鼻咽喉科」を開院し、早いもので４年が経ちました。出身は香川県高松市で、香川大学卒業後は悩むことなく大学に残り、耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局しました。「耳グループ」に所属し、森　望名誉教授、宮下武憲准教授にご指導頂き、耳科外来や小児難聴外来を担当させて頂きました。長く勤務しているうちに、自己の専門を生かした医療を提供しつつ、自分の診療スタイルで挑戦してみたいと思い、地元に開業致しました。

場所は自宅から車で10分程度の距離で、有名な田村神社からも近く、隣はイタリア料理店、向かいは海鮮居酒屋と家庭料理の食堂、徒歩数分でラーメン屋とお好み焼き屋があります。赤ちゃんから高齢者まで幅広い年齢層に受診して頂きたくて、白を基調としたアットホームなデザインとしました。待合には大きな窓を設けて開放感を意識し、受付を中心にして待合を子供用と大人用に分けて設計しました。子供用には大きなキッズスペースとソファを設置し、子供が退屈しないようにアニメや絵本、おもちゃで遊んでもらって、お母さんの待ち時間のストレスもなるべく減らせるようにと考えて作りました。絵本や月刊誌とは別に、廊下に大きな本棚を作り、少年漫画から青年漫画まで幅広く揃えて、待ち時間のストレスを感じずに過ごせるようにしました。新型コロナウイルス感染症の流行のさなかでの開業でしたので、屋外での抗原検査に対応できるよう、診察室からすぐに屋外に出て行ける設計にしました。

診察室は車椅子やベビカーでもスムーズに入れるように広く設計しました。診察ユニットには手術用の顕微鏡を設置し、ファイバースコープも複数本準備しています。だいぶ老眼が進んできましたので、手間ではありますが、これらの機器を使用して正確な所見をとるように心がけています。また、正確な聴力検査が行えるように高度な遮音性能をもつ防音室を作り、通常の聴力検査に加えて、乳幼児の聴力検査器具や補聴器の適合検査が行えるようにしました。また、３社の認定補聴器専門店に協力して頂いて補聴器外来を行っています。補聴器を視聴・貸出を行い、納得してから購入して頂くようにしています。アレルギー検査では、注射器を使わずに指先から１滴（20μL）の血液を採取するだけで食物アレルギーや花粉症などの原因アレルゲン41項目を調べることができるアレルギー検査装置『ドロップスクリーン』を使用しています。

開業して３年ぐらいは、新型コロナウイルス感染症の対応で手一杯でしたが、ようやく落ち着き、通常の診療に戻ってきました。今後も患者様のお声を聴きながら、地域の皆さまに長く愛されるよう、スタッフとともに少しずつ良いクリニックを作っていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。


検査室

アプローチ

たかた内科医院（香川県観音寺市）

医院　高田　忠幸（平成23年卒・26期生）

当院の近況報告

拝啓

晩秋の候、諸先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より格別のご指導とご支援を賜り、心より厚く御礼申し上げます。私は卒後３年目（平成25年４月）より香川大学医学部消化器・神経内科医局に在籍し、直近３年間（令和３年４月～令和６年３月）は香川大学寄附講座の一つである自治体病院・推進医学講座に所属しておりました。このたび、本稿執筆のご依頼をいただき、身に余る光栄に存じます。僭越ながら、ここに私が内科医院を営む中での現状についてご報告させていただきたく存じます。

さて、本稿を執筆しております本日は令和６年11月12日です。私が開院いたしました令和６年５月７日から、早いもので半年が経過しています。当院は、私の故郷である香川県観音寺市に位置しております。内科と脳神経内科を専門とし、内科疾患全般に対応しております。高血圧症や糖尿病、脂質異常症などの慢性疾患の管理や、風邪や胃腸炎などの急性疾患に加え、頭痛や認知症を含む神経変性疾患、運動異常症にも力を入れ、地域医療に貢献できるよう努めております。設備としてはCTや呼気一酸化窒素濃度測定機器、さらには医院では比較的稀な神経生理検査機器も導入しています。標榜科が「内科・脳神経内科」であるためか、頭痛やしびれに対する不安を抱えて受診される方が多く、一定の需要を感じております。また、今年はマイコプラズマ肺炎による長引く咳の患者様が多く、肺疾患の精査や気管支喘息・アレルギーの評価を希望される方も増えている印象です。一般診療に加え、地域の企業や団体から産業医としての業務依頼もいただき、職場環境や従業員の健康管理にも携わる機会を得ております。働く方々が心身ともに健やかに職務を遂行できるよう支援し、地域全体の健康維持に寄与することも私にとって重要な使命と感じております。また、産業医資格の維持のために、現在も香川大学医師会にお世話になり、数カ月に一度、定期的に香川大学医学部キャンパスに出向いております。キャンパスに入ると、数時間ではありますが、元同僚や同窓の先生方との会話が弾み、こうしたひとときを楽しみにしています。

開院から半年が経過した今も、来院いただけている方々からいただくお言葉や日々の診療を通じて得られる学びは、私にとって大きな成長の糧となっております。診療を通じて日々感じるさまざまな出来事が、医師としての姿勢をさらに磨き、医療に携わることの責任とやりがいを一層感じさせてくれております。

最後になりますが、現在、無事に医院を運営できているのは、これまでお世話になった多くの先輩方、同僚、後輩、コメディカル、そして各企業様のお力添えがあってこそと、心から感謝しております。まだまだ未熟ではございますが、開業医として精一杯努力してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

『私のキャリア』ケーススタディ Vol. 3

2004年度から開始された新臨床制度、2024年４月から施行されている医師の『働き方改革』、医師の指導体制や診療体制の変化を実感する日々です。これまで、日本の医療提供体制が医師の献身的な努力で支えられてきたと言っても過言ではありませんが、そもそも『働き方』はライフスタイルと密接に関連します。医師としての存在意義や責任感と、自分自身の人生との調和をどう保つかで、悩んだことがある医師は男女問わず少なくないでしょう。

このコーナーでは、医療を取り巻く環境が変わりゆくなかで、卒業生の皆様が悩みや課題をどのように乗り越えてきたか、その経験や打開策等を幅広く紹介させて頂きたいと考えています。

皆様のキャリアアップの参考として、自分らしく働き続けるためのヒント探しの一助となることを願っています。

今回は、育児と両立しながら大学で研鑽した後、地域に根付いたクリニックでご勤務されている産婦人科の女性医師にお話を伺いました。

（担当：泉川美晴）

▼プロフィール

年齢・性	50代・女性
専門	産婦人科
居住区・家族	近畿圏、 夫・子供２人

▼キャリア年表

卒年	WORK	LIFE
	香川医科大学医学部卒業	
卒後１–２年	某大学産婦人科入局、大学病院で研修 産婦人科以外に麻酔科、NICU、救急での研修あり	結婚
卒後３年	大学病院臨床研究医として勤務	
卒後４年	市中病院①常勤医として勤務	長女出産
卒後５年	大学病院臨床研究医として復帰	
卒後６年	市中病院②常勤医として勤務	
卒後７年	産婦人科専門医取得	次女出産
卒後８年	大学病院勤務、助教として復帰	
卒後15年	大学助教退職	
	新規開業クリニック常勤医として勤務	
卒後23年	同クリニック副院長就任	
	現在に至る	

Q専門分野を決めた理由と時期は？

自分が女性のため、医学部に入学する前から月経や妊娠、出産等女性の体の仕組みに興味があり、大学４年の臨床講義を受けてからは産婦人科以外考えられませんでした。

Q現在のキャリアに至るまでに感じた壁はありますか？

次女出産後大学に助教として復帰した際、求められる業務と自分のやりたいことが一致しなかった時です。

Qそのとき、どのようにして壁を乗り越えましたか？

産婦人科は当直回数が多く激務なうえ医局員が少なく、自身のやりたいことだけに専念すると業務が成り立たたないためある程度の自己犠牲が必要でしたが、徐々に医局員に女医さんが増えてきている時期だったため、数人と協力しながらお互いの目指す方向に近い形で業務分担を行いました。その後それが発展し主治医チーム制へとなっています。

Qこれまで大変だったことは何ですか？

子供が体調を崩した際、当時はまだ病児保育があまりなく早退や欠席になったときの迎えやその後の世話の人員確保です。

Q大変だったときにサポートとなった人物や支援、制度は？またはどのようなサポートがあれば良いと思いますか？

夫は単身赴任だったため迎えは難しく、自分の外来や手術が入っていないときはなるべく自分が早退したり休んだりしました。幸い夫の実家が近くにあり、どうしても休めないときはお世話をお願いしていました。今では病児保育も整い時短勤務制度もあり、急なトラブルにも対応しやすくなっているように思います。

Q今後、どのようにキャリアを積んでいきたいですか？

卒後15年目に大学を退職し、念願だった産科クリニックの勤務医として新たなスタートを切りました。大学ではシビアな状態の患者さんが多かったため、そうならない幸せな命の誕生を目指し日々邁進中です。また妊娠出産だけではなく、月経開始後から産後、閉経に至るまでの女性の様々な悩みにも向き合い、皆が笑顔になれるようなケアを模索しています。

些細なことでも気軽に受診できるよう敷居を低くし、専門治療が必要な場合は早急かつ的確に高次医療機関へ橋渡しできるよう精進しています。

Q医師の働き方についてどのようにお考えですか？

科によって大きく状況は異なると思いますが、医師という仕事を鑑みるにある程度の自己犠牲は覚悟する必要はあると思います。が、ライフワークバランスの必要性がうたわれ始め、働き方改革なるものが始まった昨今、自身の人生においてどの時期にどのような重きを置くかは以前に比べると考えやすくなっているように感じます。自己犠牲を追求するのも一つの選択であり、プライベートに重きを置くことも大事、それぞれの価値観を押し付けず認め合えばより働きやすい環境になるかと思っています。

Q学生や研修医にアドバイスをお願いします

熱い思いをもって医学部に入学し、努力を積み重ねて医師となった皆さん、期待しかありません。色んな思いは胸の内に秘めず、ぜひ言葉に出して伝えて欲しいと思います。困っていること、助けてほしいこと、理不尽に思っていること、やりたいこと等、我々の世代も若い世代を理解し応援、協力したいと思っているはずですので。

学会開催報告

《第16回日本Acute Care Surgery学会学術集会》

消化器外科　大島　稔
（平成16年卒・19期生）

主催スタッフ

岡野大会長挨拶

香川大学　消化器外科学講座　教授　岡野　圭一が大会長として、「Acute Care Surgeryが拓く外科の未来」をテーマに第16回日本Acute Care Surgery学会学術集会を2024年９月27日・28日の２日間、サンポートホール高松・かがわ国際会議場で開催致しました。近年では最多の参加人数となる559人の方々に御参加いだくことができました。本会の開催にあたり、副会長の救急災害医学講座　教授　黒田　泰弘　先生をはじめ、救急災害医学講座のスタッフの皆さま、そして讃樹會の皆さまには大変力強い御支援をいただき、心より御礼申し上げます。

Acute Care Surgery は、Trauma Surgery・Emergency General Surgery・Surgical Critical Care・Surgical Rescueといった重要な領域を統合した比較的新しい概念です。本学術集会を通じて医療の原点である”目の前の患者の命を救う”という使命感を一層強く抱き、また若手医師や医学生にとっては外科医や救急医の魅力を感じていただく大変貴重な機会となったと確信しております。さらに、期間中に開催した「外傷外科手術指南塾」、「外傷看護セミナー」にも多くの医師や看護師の方々に御参加いただき、臨床に則した見識を深めていただくことができました。

ハンズオンセミナー

加えて、米国ニューメキシコ大学のEdward Auyang先生を招聘し、ハンズオンセミナー「Stop the Bleed」を企画し外傷レクチャーに加え、一般市民や医療従事者向けの出血患者に対する基本的な圧迫方法やターニケット（止血帯）を用いた止血の技術を御教示いただきました。また、米国のAcute Care Surgeonの労働環境の変遷として、20年かけて行った働き方改革と現状を御教示いただき、今の日本の外科医の労働環境は米国の20年前とほぼ同じだと御指摘をいただきました。改めて危機感を覚えるとともに、若手外科医をリクルートし医療体制を維持するためにも、働き方改革を前進させていく必要があると強く感じました。

Auyang先生のみならず、外傷外科の多くのレジェンドの先生方にも御講演を賜り、主催した当科スタッフも大変刺激を受けました。本学術集会の開催を御支援いただき、私達にとっても大変有意義な成長の機会を与えていただきました讃樹會の会員の皆さまに深く御礼申し上げます。今後も一層、若手教育も大切にしながら、香川県における救急拠点病院としての責務を果たしていく所存です。今後とも御指導を何卒宜しくお願い致します。

会場風景

支部会・懇親会

第23回讃樹會関東支部会開催報告

2024年11月16日（土）18―20時 RISTORANTE E'VOLTA il cielo 銀座プレミア

讃樹會関東支部会の新たなスタート―香大医卒業生の関東ハブ拠点を目指して

井上　英樹（平成15年卒・18期生）

2023年11月のある日。東京・日暮里にある私のクリニックに、懐かしい声が電話口から聞こえました。「よう、ヒデキ。元気？」

その声の持ち主は、日本医科大学糖尿病・腎臓内科の教授である岩部真人先生でした。岩部先生が日本医科大学の教授に就任したことは、讃樹會の会報で知っていましたが、自分の開業の忙しさにかまけて、お祝いの連絡をしそびれていたところでした。岩部先生とは大学時代の同級生であり、弓道部の同輩でもありました。その電話の後、後日彼が私のクリニックに訪問してくれ、大学卒業以来、20年ぶりの再会となりました。旧知の友人の訪問は、開業医となりやや孤独となりがちな日々の中で心温まる出来事でした。「やはり、持つべきものは友人だな・・・」と、しみじみと思う一方、その裏にある意図をなんとなく感じ取ったのは、大人ならではの勘でしょうか？なぜなら、岩部先生が讃樹會関東支部会の支部会長に新たに就任したことも、讃樹會会報で知っていたからです。「これは何か仕事が増えるかな・・・？」―その予感、近くも遠からず。今回この記事を書くことに至ります。

岩部先生が所属する日本医科大学にも香川大学医学部卒業生が在籍しており、岩部先生を中心とした卒業生有志で「nica（ニカ）の会」という集まりを作っていました。日本医科大学がある千駄木から私のクリニックがある日暮里は距離的に近いということで、私もnicaの会に加えていただくこととなりました。ちなみに、岩部先生曰く、nicaはラテン語を語源として、「勝利」、「成功」、「強さ」を意味しているそうです。このnicaの会メンバーを基盤に、讃樹會関東支部会の運営委員会を新たに発足し、準備を進めました。メンバーは、岩部真人先生（18期生、委員長）、原義明先生（７期生）、阪口正洋先生（26期生）、村田智洋先生（29期生）、藤綱隆太朗先生（30期生）と私の６名となりました。

本誌読者の先生方がそうであるように、香川大学には全国各地から入学者が集まり、卒業後それぞれの志を抱いて、香川に残る先生もいれば、自身の地元に戻る先生、そして、香川から遠く離れ東京に向かう先生もいます。日本の人口分布から考えると関東圏で勤務する先生が多くなるのは必然的なところですが、その関東で勤務する香川大学卒業生の先生方は、単身で知り合いもなく孤軍奮闘されているケースが多かったのではないかと思います。岩部先生自身も卒業後、東京大学で誰よりも努力されており、その思いが特に強いのではないでしょうか。かくいう私自身も香川医科大学を卒業後、京都大学、アメリカ・ピッツバーグ大学、昭和大学と各地を転々とした身から、卒業生の集まりというものに、ある種の羨望に似たものを常に感じていたのも事実です。もちろん香川大学にも讃樹會関東支部会という存在があることは以前から知ってはいましたが、何となく先輩先生方の集まりというイメージが強く、なかなか参加する勇気がなかったというのが私の状況でした。今回、関東支部会を岩部支部長の元で開催するにあたりその開催意義を改めて運営委員での話し合いをもちました。「もっと気軽に同窓生が集まることができる会がよい」、「医師としてのキャリアを相談したり、人材のネットワークを広げる機会にしたい」などの意見が上がり、相互交流ができるような会にしていこうという方向性で進めることになりました。運営委員会メンバーによる会合と杯を重ね、関東支部会開催に向けて準備を行いました。

前置きが長くなってしまいました。第23回讃樹會関東支部会は、2024年11月16日土曜日18時から、三井ガーデンホテル銀座プレミア16階にある、RISTORANTE E'VOLTA il cieloで開催いたしました。今回は、より多くの先生方と交流ができるように例年の着席形式からビュッフェスタイルの立食形式に変更しました。会場も東京・銀座とアクセスが良い場所を選定し、開催日も遠方の先生方も参加しやすいように土曜日夜とさせていただきました。いずれの施策も岩部先生のアイ

デアです。そのおかげで、今年は62名と例年の２倍以上の参加者数となり、昭和61年卒（１期生）から平成30年卒（33期生）までという30年以上の幅広い年代の先生方に参加いただくことができました。当日は、岩部先生からの関東支部会の今後の方針について話があり、香川大学卒業生の関東における受け皿となれるよう、会を充実させていく方針が示されました。その後、応援に駆けつけていただいた西山医学部長からのご挨拶があり、「どうか卒業後も香川大学を愛していただきたい」と激励のお言葉をいただきました。その後、西山医学部長から乾杯のご発声があり、一同ご歓談となりました。同年代の集まりや、同じサークルでの集まり、同じ診療科での集まりなど自然発生的にお互いのつながりを見つけながら楽しそうにお話をされていたのが印象的でした。参加者全員に香川大学卒業という共通したベースがあることが、スムーズなコミュニケーションに貢献しているのだと思います。会の最後には、前関東支部長である内山先生からご挨拶をいただき、無事閉会となりました。その後、有楽町に移動し２次会が開催され30名ほどの先生方にご参加いただきました。学年の垣根を超えた親睦を深めることができました。おかげさまで今回多くの先生方に参加いただきましたが、大きなトラブルもなく今回開催できたことが、ひとまず一番良かったことかと思います。ただ、イベント運営には素人同然の私たちですので、会の進行に至らない点がありましたことをこの場を借りてお詫び申し上げます。また温かく見守っていただきました先生方に感謝申し上げます。

今回初めて関東支部会に参加された先生も多く、慣れない点もあったのではないかと思います。また知り合い以外の先生と話す時間が足りなかったかもしれません。次回はより交流の範囲を広げていただければ主催者としてもうれしい限りです。来年度はより多くの先生方に、リラックスしてご参加いただけるよう、私たちも引き続き準備を重ねてまいります。私たちはこの讃樹會関東支部会が関東在住の香川大学卒業生のハブ拠点となることを目指しています。日常の職場や学会、研究会などとは異なる、診療科・学年を超えたネットワーク・コミュニケーションを多くの先生方に楽しんでいただきたいと思っています。特に、若手医師の方々にとっては、キャリアのヒントが得られる場であり、悩みを共有できる安心感も魅力です。初参加でも大丈夫！リラックスした雰囲気の中で、美味しい料理を楽しみながら、同窓生同士で自然と会話が弾むはずです。「卒業後、こんなに楽しい集まりがあるなんて！」と思っていただけること間違いなし！お一人での参加でも、もちろんお知り合いとご一緒でも大歓迎。次回の開催で、新たな交流を楽しんでみませんか？運営委員一同、心よりお待ちしています！

【第23回讃樹會関東支部会フォトギャラリー】

第24回 讃樹會 関東支部会
開催日時決定！
2025年11月15日（土）
18時より
都内で開催します！
詳細は後日ご案内します
皆様、まずは是非ご予定ください！

第３回岡山讃樹會開催報告／2024年11月24日（日）　ANAクラウンプラザホテル岡山

杉原　雄策（平成17年卒・20期生）

2024年11月24日（日曜日）に、香川医科大学（現・香川大学医学部医学科）の同窓会「第３回岡山讃樹會」がANAクラウンプラザホテル岡山１階「曲水の間」にて開催されましたので、ご報告いたします。本年の岡山讃樹會には、卒業生26名をはじめ、特別ゲストとして医学部長　西山成先生、ゲストスピーカーとして入江聰五郎先生、讃樹會会長　星川広史先生、名誉教授　板野俊文先生、西岡幹夫先生、細川清先生、学生３名が参加し、合計38名が集まり大変盛況な会となりました。

この会の発端は、2017年４月に岡山に戻られた岡村一心堂病院の岡村暢大先生が、香川医科大学（現・香川大学医学部医学科）とゆかりのある医師たちが岡山県およびその近隣地域で集う場として「岡山讃樹會」を立ち上げられたことに始まります。2018年10月に第１回目、2019年10月に第２回目が開催され、コロナ禍を経て、2024年に第３回目を迎えました。今年は「来たれ、讃岐育ちの秀医たち！」と銘打って開催することといたしました。

開会の挨拶は、元香川大学副学長・元医学部脳神経生物学教授で、現・香川大学名誉教授の板野俊文先生にお願いしました。続いて、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会長の星川広史先生に乾杯のご挨拶をしていただき、盛大な会の幕開けとなりました。

歓談を挟み、香川大学医学部長の西山成先生からは香川大学医学部の現状と今後の発展をテーマに貴重なご講演を頂戴しました。「奉仕の心」「社会貢献」「リーダーシップの育成」といった医学教育の中核的理念に触れる内容は、参加者の心に響く名講演となりました。

続いて、特別ゲストである入江病院病院長の入江聰五郎先生（平成15年卒）にご講演いただきました。救急医療の専門医であり、『バイタルサインからの臨床診断』の著者でもある入江先生は、実際の現場経験に基づく症例を提示し、学生や研修医に鑑別診断のポイントを問いかけながら進行する講義形式で、臨場感あふれる内容となりました。

再び歓談を挟んだ後、川崎医療福祉大学特任教授の宮本修先生による現在の香川大学医学部のキャンパスや学生時代の懐かしい写真スライドショーが披露されました。喫茶店「ポワール」の跡地や「寒川うどん」、「味泉」など、思い出の場所が多数登場し、会場には歓声と笑いが溢れる盛況なひとときとなりました。

その後、多くの先生方にスピーチをいただきました。名誉教授の細川清先生、西岡幹夫先生のアドリブスピーチに続き、抽選で選ばれた高吉理子先生、大谷剛先生、守屋芽衣先生、山田治来先生、大澤一輝さんが、近況報告や今後の展望、趣味や健康法など多岐にわたる話題で語ってくださいました。

最後に、閉会の挨拶を代表発起人の岡村暢大先生よりいただきました。会を立ち上げられた経緯、これからの医療の険しい未来、お金を生み出す大切さについてお話されました。特に学生の留年による生涯年収の低下には改めて気づかされる点がありました。最後に来年も同会を開催することを確認し会を締めくくりました。司会は前回に引き続き、私、杉原雄策が担当しました。

今回の第３回岡山讃樹會の開催にあたり、多くの方々のご協力がありました。発起人としてご尽力いた

だいた鍛本真一郎先生、蓮井光一先生、竹馬彰先生、宮本修先生、岡田浩先生、枝園忠彦先生、高吉理子先生、岡村暢大先生、杉原雄策、讃樹會事務局の方、ご参加いただいた先生方、事務を担当いただいた岡村一心堂病院秘書の三宅様をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

なお、来年も岡山駅近辺での開催を予定しております。今年は岡山にゆかりのある卒業生の先生方にお声掛けいたしましたが、連絡が叶わなかった先生方もおられるかと思います。岡山がご実家の方、高校のみ岡山に通われた方、岡山での就職を希望される方など、ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。学生は無料にしておりますのでご子息やお知り合いがおられましたらお声がけをお願いします。また、岡山讃樹會のメーリングリストも立ち上げておりますので、ご希望の方は岡村暢大先生（okamuu@mac.com）までお知らせください。世話人も随時募集しておりますので、一緒に会を盛り上げて頂ける方もお声がけください。

出席者一覧（敬称略）

氏名	卒年度	氏名	卒年度	氏名	卒年度
西岡幹夫	名誉教授	伊藤真帆	平成11年	福本康史	平成16年
綿川清	名誉教授	枝園忠彦	平成11年	杉原雄策	平成17年
根野俊文	名誉教授	濱本有祐	平成12年	飯田あい	平成18年
蓮井光一	昭和62年	大谷剛	平成13年	近藤誠之	平成18年
吉鷹秀範	昭和62年	高吉理子	平成13年	藤原敦史	平成20年
宮本修	平成1年	大河啓介	平成14年	横山聖太	平成23年
星川広史	平成2年	岡村暢大	平成14年	加藤諒	平成26年
山田治来	平成2年	佐々木佳子	平成14年	宇埜誠	平成29年
秋山正史	平成3年	中野貴之	平成14年	守屋厚衣	令和5年
角南和治	平成4年	入江敬五郎	平成15年	大森春菜	医学部生
西山成	平成5年	河合大介	平成15年	大澤一輝	医学部生
曽田吉昭	平成9年	渡辺伸一郎	平成15年	本田航大	医学部生
森賀真子	平成10年				

岡山讃樹會

岡山讃樹會

岡山讃樹會

学生の短期留学報告　*Universiti Brunei Darussalam* 2024/7/21～8/9

医学科３年　加地　倫子

2024年７月21日から８月９日までの３週間、ブルネイ・ダルサラーム大学に留学しました。現地の学生や医師の方との交流を中心とした観光・PBL・OSCE・授業・病院見学へ参加しました。

到着してから１週間は観光がメインで大学周辺のモスクでピクニックやミュージアム見学から、遠出して熱帯ジャングルの散策など幅広いアクティビティを企画してくださり、ブルネイの食文化、宗教文化についてたくさん知る機会となりました。２週間目からは本格的にブルネイの医学に接する機会を持ちました。４カ所の病院見学では、政府の病院と私立病院の設備の違いであったり、ブルネイの健康問題である生活習慣病へのアプローチをどうするかであったりについて学びました。ブルネイでは医療費は１度の診察に１ドル払うのみでそれ以外の医療費は政府が賄っており、誰もが政府の病院にかかって高度な医療が必要と判断されると私立病院にかかることができます。日本との医療制度の違いに驚かされるとともに、日本でも問題となっている生活習慣病については国民へよりよい生活習慣を増進するための正しい知識を提供する機会を設けることの重要性について学び、日本でも生かせるのではないかと考えました。PBLでは、受動的な聞く講義と違い、学生が積極的に何を理解している必要があるかについて意見しなければ進まないので能動的な学び方と感じました。日本の基礎医学をきちんと学ぶ部分とブルネイの臨床医学を能動的に学ぶ部分とをバランスよく取り入れるのが良いように感じました。

３週間を通して休みがほとんどなく、観光などで外出している時間も多い中で最後の筆記試験やOSCE、PBLの自己学習、留学報告会のプレゼンテーションの作成をしなければならなかったので時間的余裕はなく焦っていることもありましたが、とても濃い時間を過ごさせていただき良い経験となりました。何よりも現地の方々との交流がそれ以上に濃いものであったのが一番良い経験になったと感じています。現地の学生は毎回私たちのアクティビティに積極的に参加してくれたので、３週間でとても強い結びつきが生まれました。慣れない英語で意思疎通を図るのは難しい場面もありましたが、一緒にアクティビティを楽しむことができたことでより活動が楽しいものとなりました。

病院にて　（中央マスク２人の右側が筆者）

モスク

クロージングセレモニー

似た志を持った新しい仲間が増えること、慣れない土地での生活に適応すること、慣れない言語で試行錯誤しながらコミュニケーションをとること、慣れない場所で起きた問題を解決することは留学ならではの経験だと感じました。そして、困難があっても周りの人たちの助けで何とかなるし、人との関わりの力強さについても感じられるのは留学の良さだと思うのでぜひ後輩におススメしたいと思いました。全力で楽しむのが良いと思います。12月にはブルネイから香川に数名、ブルネイで仲良くなった学生が留学して来るので、その時にはブルネイでたくさんの物資をいただいたり、たくさんの場所に連れ出してくれたように交流できるのが楽しみです。将来医師となってからもお互いを励みに努力を続けようと考えています。

4年　森　尚希

私は７月21日～８月９日の約３週間をブルネイ・ダルサラーム国で過ごしました。ブルネイは、石油や天然ガスといった資源を多く産出する国で生活水準が高く、福祉制度が非常に充実しています。公用語はマレー語ですが、英語を話すことが出来る人が沢山います。私たちが留学したブルネイ・ダルサラーム大学（以下UBD）では講義の大部分が英語です。

１週目では主にISMS説明会や歓迎セレモニー、病院見学、観光を中心に行いました。歓迎セレモニーでは現地の楽器演奏や伝統料理、中華料理を食べながら先生やバディー達と親睦を深めました。病院見学では国立のRIPAS Hospitalと私立のJPMCが特に印象に残りました。RIPASでは小児科、産婦人科を中心に見学を行いました。JPMCはRIPASでは対処しきれない重症患者が運ばれてきます。ここでは放射線科と心臓外科を見学しました。放射線科では最新のMRIも導入されていました。心臓外科では、日本で生産された機器を用いて経皮的IVなどの治療を行っていました。

２週目ではPBLやOSCEの講義、実践を行いました。日本の医学授業はレクチャー方式なのでPBLは文化の違いを感じました。内容は主に心臓についてのPBLでしたが、疾患やメカニズムだけでなく、積極的にチームに加わる姿勢も学びました。OSCEでは基本的な診察の方法を学びました。英語で診察を行うという事もあり、初めは日本語のように上手くいかずに苦戦していましたがバディー達の積極的な協力もあり、最後には上手く診察が出来ました。

３週目ではPBLの発表やOSCE試験、筆記試験、クロージングセレモニーを行いました。クロージングセレモニーではUBDの学生と共に練習したソーラン節やダンスを発表しました。とても楽しかったです。私にとってこの３週間はかけがえのない思い出になりました。留学で学んだ積極性を忘れずに今後の人生に活かしていけたら良いと思いました。

RIPAS Hospitalの心臓外科を見学しました。

RIPAS Hospitalからの絶景です。

最後に、これから留学に行く予定の後輩や興味がある後輩へのアドバイスです。まずは留学先の文化やルールを事前に確認するなどの準備をして下さい。相手の国を知り、相手の国の文化や歴史を尊重して下さい。そして積極性を持って過ごして下さい。たとえ英語力が低くても留学先の学生や先生方に積極的に話しかけて交流をして下さい。授業を英語で受けるのは大変ですが、またと無い機会ですので勉強以外のことも全力で楽しんで良い留学生活にして下さい。

PBLやOSCEの講義、実習の様子です。緊張感もあり、とても勉強になりました。

Ambuyatと呼ばれる餅に似た伝統料理です。美味しかったです。

学生支援（競争的資金）活動報告

2024年度

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とした学生支援を行っています。採択は年間５件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。

募集要項は讃樹會ＨＰを参照下さい。

IFMSAK活動報告

IFMSAK留学受け入れ担当　医学科３年　深澤　莉生

IFMSAK Exchange部門では、主に留学生の受入・送り出しや留学生との交流、留学に向けた英会話やIELTSの勉強を行っています。

今年度は国際医学生連盟（IFMSA）の留学制度を利用して、２月にはスペインから留学生を１名、９月にはドイツから留学生を１名受け入れました。本サークルが活動を開始してから、１年間で２人以上の留学生を受け入れたのは初めての経験であり、留学生とは、栗林公園を散策しお花見しながらお雑煮を食べたり、丸亀城や四国水族館に訪れたり、屋島の夜景を楽しみました。受け入れ時の活動には、本サークル以外の学生にも積極的に協力していただき、ひとりひとりがイベントを経るごとに留学生と交流を深めることができました。

また、今年度にはエストニア、台湾、ポーランドへ留学生を３名送り出しました。３名は留学の何か月も前から、サークル活動に加え、英語や現地の言葉の勉強など地道に準備を続け、無事に留学を成功させることができました。留学後はプレゼンを行い、留学先での貴重な経験を共有してくれました。

今年度も留学受け入れ・送り出し共にたくさんの方々にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。来年度以降もより活動を盛り上げて参りますので、今後とも温かく活動を見守ってくださると嬉しく思います。

ドイツからの留学生と屋島の夜景を眺めに

エストニアで留学生たちとラストディナー

学生支援（競争的資金）活動報告
―自ら学び、地域に貢献―

香川大学医学部ACLS勉強会　部長　医学科３年　岩本　啓史

香川大学医学部ACLS勉強会は救急医療を学ぶ学生団体です。私たちは「自ら学び、地域に貢献」を理念とし、BLS （１次救命措置）、ACLS （２次救命措置）、外傷のための外科手技など、様々な技術や知識を学ぶとともに、イベントなどを通じて、地域に医学知識や医学の魅力を普及させる活動を行っています。

今年度は通常活動に加え、様々な挑戦をしました。その中でも特に印象深い活動を２つご紹介いたします。

まず１つ目は医学部祭での企画です。本年秋に開催されました第45回香川大学医学部祭にて、「医学生が伝授する本気の医療手技体験」を実施しました。本企画は、主に香川県内の中学生・高校生を対象とし、腹腔鏡手術シミュレーターや結紮、BLSなどを通じて、医療の魅力を感じてもらうことを目的としたものです。企画の立案から実行に至るまで多くの困難がありましたが、予約開始からわずか１日で定員に達するほどの盛況ぶりで、体験終了後のアンケートでは、満足度が98.5%（回答41件）に達し、「とても楽しかった」「医師になりたい気持ちがさらに強まった」などの嬉しい声を数多く頂戴しました。医療の魅力を伝えることで多くの方に笑顔をお届けできた経験は、ACLS部員一同の心に深く刻まれております。

〈上図〉本年９月に東京医科大学で開催された「第10回全国医学生BLS選手権大会」の様子

つぎに２つ目は、全国医学生BLS選手権大会（以下BLS選手権）です。BLS選手権とは全国の医学生のBLSの知識・技術の向上を目的に開催される大会で、第10回目となる本大会（９月22日@東京医科大学）では全国から過去最多の47大学が一堂に会し、その技術を競いました。数年ぶりの参戦ということもあり、メンバー一同、緊張しておりましたが、大学対抗戦で全国３位、大学混合戦で全国３位、総合で全国４位の結果を収めることができました。私たちが磨いてきた技術は全国の医学生の中でも劣らないものであると確認ができたとともに、課題も多く見つけることができました。来年は優勝します。

〈上図〉2024年医学部祭「医学生が伝授する本気の医療手技体験－第二部」の様子

このように様々な新しい分野への挑戦ができますのも、常日頃よりご指導いただいております先生方のおかげであり、この場をお借りし心より御礼申し上げます。引き続き学生の立場から、香川の医療の発展に寄与できるよう努めてまいりますので、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

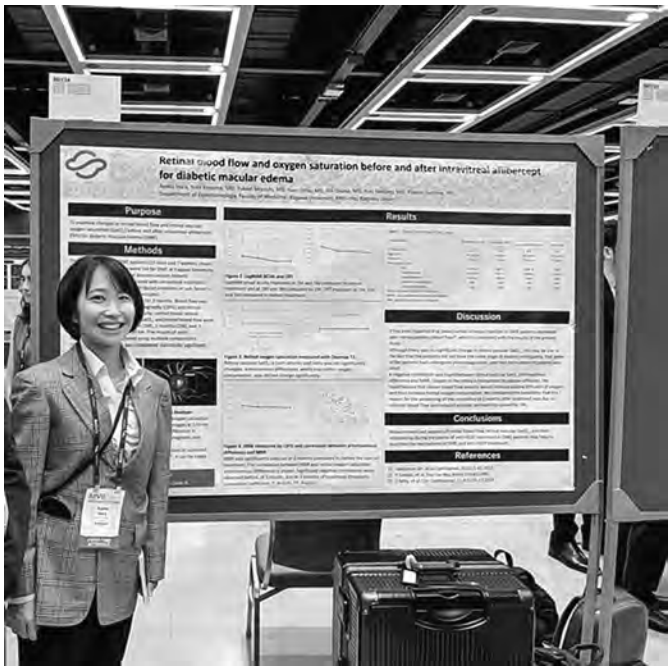
学生支援（競争的資金）活動報告
～ARVO 2024 Annual Meetingの出席～

医学科６年　原　彩香

学会名：ARVO 2024 Annual Meeting
開催地：Sattle Convention Center
参加期間：2024年５月４日～2024年５月12日

ARVO 2024 Annual Meeting に出席し、演題「Retinal blood flow and oxygen saturation before and after intravitreal aflibercept for diabetic macular edema（糖尿病黄斑浮腫におけるアフリベルセプト硝子体注射前後の網膜血流と酸素飽和度）」について発表した。IVA注射を１か月に１回３か月間施行し、それぞれの網膜血流と網膜血管の酸素飽和度を測った。解析の結果、網膜血流速度の指標であるMBRと網膜酸素飽和度の動静脈差に負の相関があることが分かった。網膜血流や酸素飽和度、またそれらの相関を解析することで糖尿病黄斑浮腫治療の発展が期待できる。また我々の活動と、研究に使用した日本製の機器をPRできた。

初めての学会発表で緊張したが予想よりうまくできたと思う。様々な国の医療関係者が英語でディスカッションをしている様子を見て、英語を不自由なく使えなければ最新の医療に携われないことを実感した。一刻も早く英語を上達させて、グローバルな医師になりたい。発表ではいくつか質問をいただき非常に有意義な時間になったと思う。まずは医師になることが目標だが、ゆくゆく大学院への進学や研究留学を視野に入れてキャリアを積みたい。



カンボジアでの新生児蘇生法普及に向けた継続的な支援に向けて

香川国際協力NGO　U-dawn
第４期代表　医学科３年　**地藤　湧騎**

香川国際協力NGO U-dawnは、2021年に香川大学医学部の学生数名で設立された国際協力団体です。現在では全学部から同じ志を持つ学生が参加し、カンボジアへの支援活動を行っております。

医療支援プロジェクトチームでは、特に「新生児医療」の分野の支援をしています。カンボジアの新生児死亡率は日本の14倍に及びます。これはポル・ポト政権下の大虐殺による影響が大きいと考えています。

2021年度にはクラウドファンディングを実施して新生児蘇生法訓練用人形２体を購入し、現地のNPOに寄贈しました。以降はNPOと合同で講習会を開催し支援を続けております。

2024年夏季休業期間には学生３名がカンボジアへ渡航し、モングクール・ボレイ・リフェラル病院にて第４回目となる講習会を行いました。今回は同病院の医療従事者に加えて周辺地域の病院からも受講希望者を募り、医師・看護師・助産師の延べ23人に参加していただきました。講習会を通じて得られた知識や技術が各病院で共有され、より多くの赤ちゃんが救われることを願っております。

U-dawnは『今日の笑顔を守り、明日の可能性を広げる』をビジョンに掲げ、活動を通じてカンボジアの方々の笑顔を増やすことを目指しています。学生が自ら考え挑戦する機会をいただけていることに心より感謝申し上げます。今後も引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

―講習会講師と受講者とともに―

第45回香川大学医学部祭 開催報告

医学部祭まであと１日！緊張とワクワクでいっぱいです!!

医学部祭実行委員長　医学科３年　**松木　陽紀**

今年は実行委員によるオープニングバンドが開会を盛り上げてくれました

屈強な警備局によって医学部祭の安全は守られています

事務広報局がオリジナルのタオルやＴシャツを作成してくれました！

▲お笑いライブも豪華なメンバーで大盛況でした！

今年も香川大学医学部祭を10月11日～13日の三日間にわたり開催することができました。今年度も準備の段階から様々な課題がありましたが、多くの方々のご支援とご協力のおかげで無事に開催することができました。

今年度の医学部祭のテーマは「シン・医学部祭～新たにきざむ　ここからはじまる～」でした。今回の医学部祭では医学部再開発に伴う“新”しい講義棟とともに、“神”がかり的な盛り上がりをみせるために実行委員一同が“真”剣に準備し、学生も地域の方々も医学部祭に関わった皆様が“心”から楽しんでいただきたいという願いを「シン・医学部祭」というテーマに込めました。また、昨年度以前の医学部祭の魅力を存分に引き継ぎ、よりパワーアップした医学部祭を作り上げることでここから新しい歴史をきざむという意気込みをこめてサブテーマを掲げました。このテーマの実現に向けて実行委員一同、全力で準備に取り組んでまいりました。

今年は特に３年生が主体となり、初めての挑戦にも積極的に取り組みました。私たちはご来場いただいた皆様方に医学部祭を満喫していただき、来年もぜひ来たいと思っていただけるよう、様々なプログラムと企画を準備しました。医学展では幅広い年代の人が医学に触れるチャンスを提供できるよう体験型の企画を実施し、講演会や映画上映会では、皆様に興味を持っていただけるようなものを取り上げました。

歴代の実行委員長による差し入れです！

実行委員によるBINGOやコンテストなどの観客参加型の企画や、軽音楽部・アカペラサークル「S-po」・ダンス部による迫力のあるライブ、医学部管弦楽団の演奏会、屋内、屋外のステージ企画も充実したものになりました。

また、昨年度から始まった「医学部Radio」で

は直接医学部祭に足を運べない方々にも医学部祭の盛り上がりをお届けすることができました。各部活動が協力して運営する模擬店は、活気にあふれ、皆様方に笑顔をお届けすることができました。

軽音楽部、企画局などが中心となってステージを盛り上げてくれました！
ステージ企画に参加してくれた方々もありがとうございました！

医学部祭終了後には、多くの学生から「本当に楽しかった！」「来年も楽しみにしている！」といった感想をいただき、実行委員一同、大きな達成感を感じています。長期間の準備は決して簡単なものではありませんでしたが、無事に成功を収めることができたのは、参加者の皆さん、関係者の皆さんのご協力があったからこそです。

最後になりますが、第45回香川大学医学部祭を支えてくださった讃掛會、医師会、学生会、後援会、学友会、本学の皆様、そして香川大学の教職員の皆さまに、心より感謝申し上げます。これからも香川大学医学部祭がさらに発展し、学生や地域の皆さまに愛される行事となるよう尽力してまいりますので、今後とも温かいご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

クロージングセレモニー!!
みんなで風船を飛ばして最高の思い出ができました

現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡は、讃樹會HP、メール、FAX、郵送いずれでも結構です。

スマホはこちら

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會行き

（TEL・FAX　087-840-2291）

会 員 情 報 変 更 届

記入日　　年　　月　　日

卒　業　年	S・H・R・院　　年	希望送付先	勤務先・現住所・実家
該当するものに○をお付けください	開業医　／　産業医　／　勤務医　／　研修医　／　在校生 その他（　　）		
ふりがな			
氏　名 （旧姓・旧名）	（　　）		
現住所 公開 可　□ 不可　□	〒		
	TEL	FAX	
	E-mail		
勤務先 公開 可　□ 不可　□	名称	部署	
		役職	
	〒		
	TEL	FAX	
	E-mail		
恒久的住所 （実家） 公開 可　□ 不可　□	（氏名・続柄　　） 〒		
	TEL	FAX	
連絡事項及びメッセージ			

※公開の可・不可にチェック　☑　を入れて下さい。

（事務局記入）　処理日　　年　　月　　日

切り取り線

編集後記

寒さが和らぎ、少しずつ春の気配が感じられる季節となりました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。最近、芸人の銀シャリ・橋本さんの著書『細かいところが気になりすぎて』を読みました。40歳を過ぎて自分の仕事や人生に対する価値観を見直す機会を持ったという内容でした。私たち医療従事者も、日々の診療に追われる中で、時に立ち止まって自身の医療への向き合い方を見つめ直す機会が必要かもしれません。橋本さんは「一生懸命やっても、時代とか、運とか、どうやら努力だけじゃ説明できない部分はある」と語っています。医療の世界でも同じように、時には立ち止まって、自分自身と対話する時間を持つことの大切さを感じます。

さて、本号では星川新会長の年頭所感から始まり、讃樹會の活動が多岐にわたって報告されています。特に印象深かったのは、外科手術基本手技講習会と大学祭に合わせて開催されたホームカミングデイです。屋根瓦方式で真摯に学生にハンズオンする講師たちの躍動感と久しぶりに母校を訪れた同窓生たちが印象的でした。市民公開講座では、最新の医療について熱心な質疑応答が交わされ、地域に根ざした讃樹會の存在意義を改めて実感しました。

関東支部会や岡山支部会の報告からは、地域は離れていても変わらぬ母校愛で繋がる同窓生たちの絆を感じることができました。また、「私のキャリア」のコーナーや同窓生からの開業報告は、それぞれの道を歩む卒業生たちの姿が生き生きと描かれており、後輩たちへの良きロールモデルとなっています。

昨今、医療の進歩は目覚ましく、AIの導入や遠隔医療の普及など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。橋本さんの言葉を借りれば、「いただく仕事」と「ときめく仕事」の整理が必要なのかもしれません。しかし、この会報に寄せられた様々な寄稿を拝見していると、それぞれが自分なりの道を見つけ、情熱を持って医療に携わっている姿に心を打たれます。今号は特に、母校愛を感じさせる内容が豊富でした。同窓生の皆様の活躍と、讃樹會を通じた絆の深まりを実感できる素晴らしい一冊になったと自負しております。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様に心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長　谷　　丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からのお知らせ

〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-１
TEL　087-840-2291
E-mail　sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp
HP　https://dousoukai.site/sanjukai/

◇事務局メールアドレスの変更

この度、大学メールアドレス運用におけるセキュリティー強化を受け、讃樹會事務局のメールアドレスが変更しました。

旧　mddousou@kagawa-u.ac.jp

新　sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp

◇医師賠償責任保険を年間通して受け付けています。（途中加入ができます）詳細は事務局にお問合せ下さい。

◇助成金公募のお知らせ：助成金申請の詳細は、讃樹會HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。

◆国外留学助成金公募

2025年度第１回　2025年３月末日締切　／　2025年度第２回　2025年９月末日締切

◆学会助成金公募　開催前年６月末日までに申請下さい。

◇変更連絡：現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡方法は、讃樹會HPから入力、メール、変更届用紙をFAX、郵送いずれでも結構です。

訃　報

名誉会員　村上哲英先生

（2024年３月）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。